

て、少年の五郎にも、これからの生活の困難さが、ひしひしと感じられました。

「とにかくなんとかしなければ。」

父、兄嫁、五郎の三人が力を合わせて、家の修理にとりかかりました。

床板の穴を板きれでふさぎ、その上にむしろを敷きました。骨ばかりの障子には、米俵を切り開いて、わら縄でしばりつけました。窓をふさいでしまったため、昼でも暗い家になってしまいました。

冬がきました。陸奥湾から吹きつける寒風は、戸板のすき間から、俵でふさいだ障子の間から、容赦なく吹き込んで部屋を吹きぬけていきます。

たき火をしている炉ばたでさえも、氷点下十度・十五度となつてしまいます。たいたかゆも、すぐカチカチに凍りつくありさまで、これをようやく火にとかしてすすりました。夜はかけるふとんもなく、炉を囲んでむしろをかぶつてねるので、腹の方が温かでも、背中はずりずりと寒気を感じ、眠れぬ夜が続